

蘇軾詩注解（三十）

山本和義  
蔡毅  
中裕史  
中純子  
原直枝  
西岡淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

同前（一九七七）

沈香石（一九七八）

石芝 並びに引（一九七九）

鶴の歎き（一九八〇）

曾仲錫通判が京師に如くを送る（一九八二）

錢穆父が送別に和す、并せて頓遞酒を求む（一九八二）

劉醜斯の詩（一九八三）

毛女の真に題す（一九八四）

一九七七（施三四一―一六）

同前

同前  
（しうぜえ）

- 1 我頃三章乞越州  
われ 頃 三章もて越州を乞い
- 2 欲尋萬壑看交流  
ばんがく たす 万壑を尋ねて交流を看んと欲す
- 3 且憑造物開山骨  
しばら 造物の山骨を開くに憑つて
- 4 已見天吳出浪頭\*  
すで てんご 已に天吳の浪頭より出づるを見る
- 5 履道鑿池雖可致  
りとう いけ 履道池を鑿るは 致す可しと雖も
- 6 玉川卷地若爲收  
ぎよくせん 地を巻くは 若為ぞ収めん
- 7 洛陽泉石今誰主  
らくよう せんせき 今は誰か主ならん
- 8 莫學癡人李與牛  
まな 痴人の李と牛とを

〔原注〕石中似有海獸形狀（石中に海獸の形狀有るに似たり）

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。時に知定州として定州にあった。

○王注は、「同前」の二字を欠く。この律詩は連作三首の第二首。『蘇軾詩注解（二十九）』に収める作品番号

一九七六の古詩「雪浪石」の詩題の注を参照。

12○我頃・欲尋二句 三章は、元祐七年（八年）にかけて出された蘇軾「兵部尚書に任ぜられて外郡を乞う劄子」・「兩職を辭して并びに郡を乞う劄子」・「越州を乞う劄子」（『蘇軾文集』卷三七）の三通の奏上文をさす。『蘇軾詩注解』（二十九）に収める作品番号一九六三の詩の注を参照。万壑は、『世說新語』言語篇の、「顧長康（顧愷之）會稽従り還る。人 山川の美を問う。顧云う「千巖秀を競い、万壑流れを争う……」と」の故事をふまえる。交流は、川が交わり流れること。蘇軾「梁先・舒煥と舟を泛べて……」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二五六頁）を参照。二句は、蘇軾が会稽（浙江省）の山々を交わり流れる谷川の美しさに心惹かれて、越州知事への転出を願ったことをいう。3○山骨 山の骨格をなす岩石をいう。蘇軾「仏日山の榮長老の方丈 五絶」その三の注（『蘇東坡詩集』第三冊二五頁）を参照。雪浪石の表面のさまについて、蘇軾「雪浪齋の銘 并びに引」（『蘇軾文集』卷一九）に、「予れ中山の後圃に於て黒石の白脈なるを得たり」とある。4○天呉 八つの頭をもつ水神のこと。『山海経』海外東経に、「朝陽の谷の神は天呉と曰う、是れ水伯（水の神）為り。蜃蜃の北、兩水の間在り。其の獸為るや、八首人面にして、八足八尾、皆な青黄なり」とある。原注にあるように、この雪浪石の表面にみえる海獣のような形を天呉にみたてていう。5○履道鑿池 履道は、白居易が洛陽城内の東南部履道里に造った邸宅のこと。白居易「池上篇 并びに序」（『白居易集箋校』卷六九）の序に、「都城風土水木の勝は東南の偏に在り、東南の勝は履道里に在り、里の勝は西北の隅に在り。西開北垣（西の坊門を入った北側の坊牆内）第一の第は即ち白氏の叟（楽天が退老の地なり）」とある。『新唐書』白居易伝に、「東都 居る所の履道里、沼を疏り、樹を種えて、石樓を構う。香山に八節の灘を鑿てり」とあるように、履道里の庭園には白居易自らの手が加えられていた。一句は、そうした庭園を営むのは可能であることをいう。6○玉川巻地 玉川は、盧仝の号の玉川子のこと。巻地は、庭園ごと持ち去ることをいう。盧仝「蕭宅二三子の贈答詩二十首 并びに序」その一四「客 井に謝す」（『全唐詩』卷三八七）に、「我れ縦い神力有るとも、争でか敢えて公と將に帰らん、揚州 悪くんぞ百姓の、我が地皮を巻くを疑わんや」とある。78○洛陽・莫学二句 李・牛は、李徳裕と牛僧孺のことで、いずれも洛陽の自邸に多くの珍しい石をしつらえて楽しんだ。李徳裕は、洛陽城の南に「平

泉莊」という別荘をもち、天下の奇花・異草・珍松とともに怪石を集めた。その後、土地の有力者たちによって怪石の多くは持ち去られたという（張洎『賈氏談録』）。牛僧孺は、石の大きさによって甲乙丙丁に分類し、それをさらに上中下に品評し、石に「牛氏の石、甲の上」などと彫り込んだ（白居易「太湖石の記」『白居易集箋校』外集卷下）。痴人は、愚か者。『世說新語』紙漏篇に「謝虎子（謝朓。虎子は幼時の字）は嘗て屋に上りて鼠を熏ず。胡兎（謝朓の子である謝朗のこと）は既に父の此の事を為すを知るに由無し。人の「痴人の此れを作す者有り」と道を聞き、之を戲笑す」とある。○〔原注〕「似有」を合注では「有似」に作るが、宋本に従う。海獸は、4句の注を参照。

わたしが先ごろ越州赴任を三たび願いでたのは、山々を尋ねて谷川が交わり流れるさまを見んがため。しかしひとまず、造物者が開いた山の骨格を成すこの石によって、波間に出づる水獸天呉のすがたまでも見るこ

とができた。

白居易の履道里のごとくに、池を掘り庭園を作り上げることができらるうが、盧仝の言うように、それを大地ごと巻き上げて持ち去ることなどできない。洛陽の庭園もいまは誰の物やら、おろかしい李徳裕や牛僧孺の真似はやめておこう。

一九七八（施三四一七）

沈香石

沈香石  
しんこうせき

- 1 壁立孤峯倚硯長  
へきりつ 壁立せる孤峰 硯に倚りて長く
- 2 共疑沈水得頑蒼  
とも 共に沈水の頑蒼を得るかと思ふ

- 3 欲隨楚客纫蘭佩  
楚客そかくに隨したがいて蘭佩らんはいを纫むすばんと欲ほつす
- 4 誰信吳兒是木腸  
誰たれか信しんぜん 吳兒ごごの是これ木腸ぼくちようなるを
- 5 山下曾逢化松石  
山下さんか 曾かつて化か松石しょうせきに逢あひ
- 6 玉中還有辟邪香  
玉中ぎよくちゆう 還またた辟邪香へきじやかう有り
- 7 早知百和俱灰燼  
早つとに百和ひやくわは俱ともに灰燼かいじんするを知らしらば
- 8 未信人言弱勝剛  
未いまだ信しんぜず 人ひとの「弱じやくは剛ごうに勝かつ」と言いうを

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○この律詩は連作三首の第三首。『蘇軾詩注解（二十九）』に収める作品番号一九七六の古詩「雪浪石」の詩題の注を参照。李之儀に、「東坡が「沈香石」詩に次韻す」詩（『姑溪居士文集』卷四）がある。

1○壁立一句 壁立は、聳え立つこと。『大唐新語』卷八にみえる、張説が富嘉謨の文を褒めた言葉のなかに「孤峰の岸を絶ち、万仞に壁立するが如し」とある。倚硯長は、長い硯屏が硯の傍らに立つさまをいう。硯屏は、硯の傍らに立てて風や塵などを防ぐついたて。石や玉で作られ「けんぴょう」とも呼ばれる。『蘇軾詩注解（二十四）』に収める作品番号一九一三の詩の注を参照。2○共疑一句 沈水は、沈水香（沈香）のこと。嵇含『南方草木状』巻中に、「木心と節とは堅く黒くして、水に沈む者は沈香と為す」とある。『四河入海』巻八の三に引く一韓智翹の問書に「石ノ形ハ頑囂ニシテ、其ノ色ハ蒼々トアル程ニ、ヤレコレハ沈水香ガ化シテ石トナリテアルカト疑（フ）ゾ」とある。

3○欲隨一句 楚客は、楚の屈原のこと。ここでは蘇軾自身を屈原になぞらえていう。蘭は香草、美德の象徴。纫はむすぶ。佩は佩び玉、腰に付ける裝飾。『楚辞』『離騷』に「秋蘭を纫びて以て佩と為す」とある。一韓智翹の問書に、「楚辞離騷ニハ草木ノ香（バシ）キヲ取（リ）テ、君子ニ比シテ云（フ）夕程ニ、此ノ石モ香（バシ）キ程ニ、アハ此（ノ）石モ楚客ニ随（ヒ）テ、蘭佩ヲ纫ントスルカゾ」とある。4○誰信一句 『晉書』夏統伝に「妓女の徒をして桂襦（ワンピース型の美しい衣装）を服い、金翠を炫かし、其の船を繞ること三市ならしむるも、（夏）統 危坐

すること故のごとく、聞く所無きが若し。（夏）充等各おの散じて曰く、「此の呉児は是れ木人にして石心なり」とある。5〇化松石 松が石化したものの。陸龜蒙「二遺の詩 并びに序」の序（『全唐詩』巻六二四）に、「二遺なる者は何ぞや、石の枕材、琴薦なり。石なる者は何ぞや、松の化する所なり。……東陽は名山多く……永康の地も亦た、其の間に蟬聯し、中に古松饒く、往往にして化して石と為る」とある。6〇玉中一句 蘇軾『杜陽雜編』巻上に「肅宗（李）輔国（輔国は、宰相のこと）に香玉の辟邪二つを賜う。各おの高さ一尺五寸にして、奇巧なること殆ど人間の有する所に非ず。其の玉の香りは、数百歩に聞く可く、之を金函石匱に鎖すと雖も、終に其の気を掩う能わず」とある。78〇早知・未信二句 百和は、さまざまな香を混合した百和香のこと。『漢武帝内伝』に「七月七日に至り、乃ち宮掖の内を修除して、坐を大殿に設え、紫羅を以て地に薦き、百和の香を燻き、雲錦の幃を張る」とある。弱勝剛は、弱い者が強い者に勝つこと。『老子』第三十六章に「柔弱は剛強に勝つ」とある。また、第七十八章に「弱の強に勝ち、柔の剛に勝つは、天下、知らざるは莫きも、能く行う莫し」とある。一韓智翊の問書に「凡ソ柔ハ剛ニ勝ツト云（フ）ハ、常ノ理也。今、百和香ノ如キハ、暫時ノマニ灰燼スルガ、此（ノ）石ハ、イツマデモ香（ル）程ニ、百和香ニハマシタゾ。サアル時ハ、柔ハ剛ニ勝ツト云（フ）ハ、信（ゼ）ザ（ル）ゾ」とある。ここでは、弱は百和香、剛は沈香石をさす。

沈香石は切り立つ孤峰のように硯のわきにあり、その堅く蒼いさまはまるで石と化した沈水香のよう。（この石が）屈原の蘭の佩玉のようにわたしの衣服を香らせてくれるなら、夏統のような朴念仁でも、それには心を動かされるに違いない。

むかし山中で松が石となっていたことがある、玉石のなかにも香りを放つ辟邪香がある。百和の香がみな灰となつて消える（けれども、この石はいつまでも香る）ことをもつと早く知っていたなら、「弱が剛に勝つ」と言う道理など簡単には信じなかつただろう。

（担当 中 純子）

一九七九（施注三四一—八）

石芝并引

石芝 并びに引

予嘗夢食石芝、作詩記之。今乃真得石芝於海上、子由和前詩見寄。予頃在京師、有鑿井得如小兒手以獻者。臂指皆具、膚理若生。予聞之隱者、此肉芝也。與子由烹而食之。追記其事、復次前韻。

予嘗て夢に石芝を食らい、詩を作りて之を記す。今乃ち真に石芝を海上に得て、子由前詩に和して寄せらる。予頃京師に在るに、井を鑿ちて小兒の手の如くなるを得て以て獻ずる者有り。臂・指皆な具わり、膚理生けるが若し。予之を隱者に聞くに、此れ肉芝なりと。子由と烹て之を食らう。其の事を追記して、復た前韻に次す。

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○嘗 宋本と王注は「昔」につくる。○石芝 仙薬とされる植物や鉱物の一種。『抱朴子』内篇卷一一（仙薬）に、「五芝なる者、石芝有り、木芝有り、草芝有り、肉芝有り、菌芝有り。各おの百許の種有るなり」とあり、石芝には石象芝や玉脂芝、石硫黄など百二十種あると記されている。蘇軾は、元豊三年（一〇八〇）五月十一日に石芝を食べる夢を見て、翌日に「石芝 并びに引」（合注卷二〇）を作っている。○海上 蘇軾は「石芝の詩の後に書す」（『蘇軾文集』卷六八）に、「中山の教授 馬君は、文登の人なり。蓋し嘗て石芝を得て之を食らう。故に此の詩を作り、同じく一篇を賦せり」と記している。文登はいまの山東省蓬萊市。北宋では登州に属した。「始め文登の海上に於て白石数升を得たり……」詩（『蘇軾詩注解』（三））の詩題の注も参照。蘇軾は元豊八年（一〇八五）に知登州をつとめた。○和前詩 蘇轍「石芝」に次韻す 并びに引（『樂城後集』卷一）のこと。蘇轍の引には、「元祐八年、予と子瞻と皆な京師に在りしとき、客の登州自ら至る者有りて言う、「海上の諸島 石の日に向かう者多く耳を生ず、海人 之を

石芝と謂う」……と。客 一籃を以て子瞻に遺り、遂に前韻に次す」と記されている。耳は、耳菜のこと、菌類の総称。○京師 都である開封のこと。○膚理 肌のきめ。○隱者 宋本と王注は「者」の後に「日」をおく。○肉芝 『抱朴子』内篇卷一一（仙薬）に、肉芝には、一万年生きた蟾蜍、千年たつた蝙蝠、千年の靈龜など百二十種あると記されている。また、『太平広記』卷二四「蕭静之」に引く「神仙感遇伝」に、蕭静之が人の手のような形をしたきのこを掘り当てるまで煮て食べたところ、齒や髪が再生して若返った話がみえ、さらに鄴都で出会った道士が蕭静之を見て駭いて、「子の神氣 是の若きは、必ず嘗て仙薬を餌すればなり」といい、その脈を診て「子の食する所は肉芝なり」といったとある。

わたしはかつて石芝を食べる夢を見て、詩を作つてそのことを記しておきました。いま本当に登州から来た客人が石芝をもたらししてくれたので、子由が前の詩に次韻して送つてくれました。わたしは近ごろ都におりませんが、井戸を掘つていて子どもの手のようなものを見つけて贈つてくれた者がありました。腕も指も皆ついで、肌にも生きているかのようにつやがあります。隠者に尋ねてみたら、これは肉芝だと言つたので、子由と煮て食しました。このことを追記して、わたしも前の詩に次韻しました。

- 1 土中一掌嬰兒新  
どちゆう いっしやう えいじ あら 土中の一掌 嬰兒 新たなり
- 2 爪指良是肌骨勻  
そうし まこと きこつ ひと 爪指 良に是れあり 肌骨 勻し
- 3 見之怖走誰敢食  
これ み おそ はし たれ あ 之を見れば怖れ走りて誰か敢えて食らわん
- 4 天賜我爾不及賓  
てん われ なんじ たまわ ひん およ 天 我と爾とに賜つて賓に及ぼさず
- 5 旌陽遠遊同一許  
せいよう えんゆう おな いっ きま 旌陽・遠遊は同じく一の許
- 6 長史玉斧皆門戸  
ちやうし ぎやくふ み もんこ 長史・玉斧は皆な門戸



- 7 我家韋布三百年  
我が家 韋布なること三百年  
8 祇有陰功不知數  
祇だ陰功有りて数を知らず  
9 跪陳八簋加六瑚  
跪いて八簋を陳ね六瑚を加う  
10 化人視之眞塊蘇  
化人 之を視るに眞に塊蘇  
11 肉芝烹熟石芝老  
肉芝 烹て熟して 石芝老ゆ  
12 笑唾熊掌嘔彫胡  
わら 笑いて熊掌に唾し 彫胡に嘔む  
13 老蠶作繭何時脫  
老蚕は繭を作して何れの時にか脱せん  
14 夢想至人空激烈  
夢に至人を想いて空しく激烈す  
15 古來大藥不可求  
古來 大藥は求む可からず  
16 眞契當如磁石鐵  
眞契 當に磁石と鉄との如くなるべし

1 ○嬰兒 『山海經』西山經に、文荃という木について「黄実は嬰兒の舌の如くして、之を食らわば人をして惑わざらしむ」と記している。蘇軾は「筍と芍薬とを送つて公扨に与う 二首」その一（『蘇東坡詩集』第四冊五三六頁）に、たけのこの形容として「頭を駢ぶ 玉嬰兒、一一 錦襴を脱す」と詠じている。2 ○良是 王注は「良具」につくるが、ここは合注に従う。3 ○怖走 『三国志』魏書・劉曄伝に、「曄」云えらく、「曹公 令有り、敢えて動く有る者は、（鄭）宝と罪を同じくせん」と。衆 皆な驚き怖れて走りて營に還る」とある。4 ○天賜一句 我爾は合注では「一に爾我に作る」という。爾は、子由をいう。天賜我は『隋書』賀若弼伝に、入朝してきた突厥の使者に対して、高祖が射を賜ると、使者は一矢にて的中させた。「上大いに悦び、突厥を顧みて曰く、「此の人 天の我に賜わるなり」とある。不及賓は『周易』姤卦の爻辞に、「九二 包に魚有り。咎なし。賓に利ろしからず」とあり、その象伝に、「包

に魚有りとは、義として賓に及ばざるなり」とある。56〇旌陽・長史二句 二句は、許氏一族には仙人になった者が多いことをいう。旌陽は、許遜のこと。『太平広記』巻一四「許真君」（『十二真君伝』による）に、「許真君 名は遜、字は敬之、本と汝南の人なり。祖は琰、父は肅。世よ至道を慕う。東晉の尚書郎邁、散騎常侍護軍長史穆は皆な真君の族子なり。真君は弱冠にして大洞君呉猛を師とし、三清法要を伝えらる。郷に孝廉に挙げられ、蜀の旌陽令を拜す」とある。遠遊は、さきの『十二真君伝』にみえる許邁のこと。『真誥』巻二〇「翼真檢」第二にみえる「真胄世譜」に、「先生 名は邁、字は叔玄、小名は映。清虚にして道を懐い、遐く世外に棲む。故に自ら名を遠遊と改む」とある。長史は、邁の弟の謚をいう。同じく「真胄世譜」に、「長史 名は謚、字は思玄、一に穆と名づく。……出でて余姚の令と為り、入りて尚書郎、郡中正護軍長史、給事中、散騎常侍と為る。外に俗務に混じわると雖も、内に真学を修め、密かに教記を授かりて、上道を遵行す」とある。玉斧は、謚の三男である翺をいう。同じく「真胄世譜」に、「小男 名は翺、字は道翔、小名は玉斧。……雷平山下に居り、業を修むること勤精にして、恒に早に洞室に遊ばんことを願ひ、久しく人世に停まることを欲せず」とある。門戸は、一族を同じくすることをいう。7〇韋布 韋布衣（なめし皮の帯と布の衣）の略。平民の衣服。韓愈「荆潭唱和の詩の序」（『韓昌黎集』巻二〇）に、「韋布里閭・樵悴專一の士と其の毫釐分寸を較ぶ」とある。8〇陰功 陰界で功績として記されるこの世でのおこない。蘇軾「蔣穎叔が熙河に帥たるを送る 并びに引」（『蘇軾詩注解（二十七）』）に、「陰功は殺さざるに在り、草を結んで魏穎に酬う」とある。9〇跪陳一句 簋も瑚も、食物を盛る祭器。『詩経』小雅（鹿鳴之什）「伐木」に、「於に粢として洒掃し、饋を陳ぬること八簋」とある。『礼記』明堂位には、「有虞氏の兩敦、夏后氏の四璉、殷の六瑚、周の八簋あり」とある。10〇化人一句 「列子」周穆王篇に、「周の穆王の時、西極の国に化人有りて来たる。……（穆）王 俯して之を視るに、其の宮・榭は塊を累ね蘇を積めるが若し」とある。化人は、幻術使い。塊は、つちくれ。蘇は、くさ。12〇笑唾一句 蘇軾「陳季常 岐亭自り訪わる……」詩（『合注』巻二〇）で「長安の富兒 一たび過らんことを求め、千金もて君を寿するも 君 笑い唾す」と詠じている。熊掌は、熊のたなごころ。『孟孟』告子上篇に、「孟子曰く、「魚は我が欲する所なり、熊掌も亦た我が欲する所なり、二者兼ねることを得可からざれば、魚を捨てて熊

掌を取らん」とある。嘸は、顔をしかめること。彫胡は、まこも。沈休文「三月三日 率爾として篇を成す」詩  
 『文選』卷三〇に、「長袂 屢しば以て拂い、彫胡 方に自ら炊く」とあり、その李善注に宋玉「諷の賦」を引いて、  
 「主人の女は臣の為に彫胡の飯・露葵の羹を炊き、来たりて臣に食らわんことを勸む」という。李白「五松山下の荀  
 媪の家に宿す」詩（『李太白全集』卷二二）には、「跪いて彫胡の飯を進め、月光 素盤に明らかかり」とある。13〇  
 老蚕一句 白居易「江州より忠州に赴くに江陵に至りてより以来……」詩（『白居易集箋校』卷一七）に、「燭蛾 誰  
 か救護せん、蚕繭 自ら纏縈す」とある。14〇夢想一句 至人は、道を修めた人。『莊子』逍遙遊篇に、「至人は己れ  
 無く、神人は功なく、聖人は名無し」とある。激烈は、蘇軾「歐陽公に陪して西湖に燕す」詩（『蘇東坡詩集』第二  
 冊一四頁）に、「竭来 湖上に美酒を飲み、酔後の劇談 猶お激烈」とある。その注も参照。15〇古来一句 白居  
 易「陶潜の体に効う詩 十六首」その十一（『白居易集箋校』卷五）に、「神仙 但だ聞説ならく、靈薬は求む可から  
 ず」とある。16〇真契一句 磁石鉄は『淮南子』説山訓に、「慈石は能く鉄を引くも、其の銅に及ぶや則ち行わざ  
 るなり」とある。一韓智勗の聞書に、「神仙ト我ト真契アル事ハ、磁石ノ鍊ヲ吸（フ）ガ如（ク）ナゾ。回縁和合シ  
 テ有（ル）ゾ」（『四河入海』卷八の三）という。

井戸を掘ろうとして土の中から掘り出した手のひらは嬰兒のそののように新しく、爪も指もついているかの  
 ようできれいな形をしています。これを見れば皆恐れて逃げ走るばかりで食べようとする者などあろう筈もな  
 く、天がわたしとあなたとに下しおかれたものなので他人に差し上げずともよいのです。

仙道を得た旌陽も遠遊も同じ許の一族で、長史と玉斧も皆やはり同族です。我が蘇家は三百年來の平民です  
 が、この間に人知れず陰功を積んでまいりました。

やんごとなき身分の家で簋や瑚など立派な祭器をうやうやしく並べていても、仙人の目から見れば土くれや  
 ちりあくたのようなもの。かつて年を経た石芝をいただき今また肉芝を柔らかく煮ただけは、これまで馳  
 走だと思っていた熊の掌に唾を吐きかけま、こも飯に眉をひそめることになりましょう。

繭を作つて自らを閉じ込めた蚕はいつになれば抜け出すことができましようか、わたしも仙人になれたらと空しい夢想にふけています。昔から仙薬というものは手に入らないと言われていますが、神仙とわたしの間にはまるで磁石が鉄を引き寄せるような素晴らしいご縁があったのですよ。

(担当 中 裕史)

一九八〇(施三四一九)

鶴歎

鶴の歎き

- 1 園中有鶴馴可呼 園中に鶴有り 馴れて呼ぶ可し
- 2 我欲呼之立坐隅 我之呼んで坐隅に立てんと欲す
- 3 鶴有難色側睨予 鶴に難む色有り 側ちて予を睨す
- 4 豈欲臆對如鵬乎 豈に臆もて對えて鵬の如くならんことを欲するか
- 5 我生如寄良畸孤 我が生 寄するが如し 良に畸孤
- 6 三尺長脛閣瘦軀 三尺の長脛 瘦軀を閣く
- 7 俛啄少許便有餘 俛して啄んで少許便ち余り有り
- 8 何至以身爲子娛 何くんぞ身を以て子が娛しみを為すに至らん
- 9 驅之上堂立斯須 之を驅つて堂に上すれば立つこと斯須
- 10 投以餅餌視若無 投ぐるに餅餌を以てすれば視て無きが若くす

- 11 夏然長鳴乃下趨  
 夏然として長鳴して乃ち下り趨る  
 進み難くして退き易きは我如かず

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○鶴歎 宋の唐庚『唐子西文録』（『歴代詩話』所収）に「東坡 病鶴の詩を作る」とあり、6句に関する逸話を録す。本詩の詩題は、もと「病鶴歎」とあったものから「病」の一字が脱した可能性がある。

2○坐隅 座のそば。賈誼「鵬鳥の賦」（『文選』卷一三）に「鵬 予が舎に集い、坐隅に止まる」とある。3○鶴有一句 難色は、厭うさま。『蘇軾詩注解（十八）』に取める作品番号一八三五の詩を参照。側腕は、鶴が斜めに構えているさま。側は、かたむく。『詩経』小雅（甫田之什）「賓之初筵」に「弁を側つること之れ俄たり、屢しば舞うこと僂僂たり」とあり、その鄭玄箋に「側は、傾なり」とある。杜甫「秋野 五首」その三（『杜詩詳注』卷二〇）に「頭を掉えば紗帽側き、背を曝せば竹書光る」とある。4○豈欲一句 臆は、胸のうち。対は、こたえる。2句の注に引く「鵬鳥の賦」に「口 言う能わず、対うるに臆を以てせんことを請う」とある。一句は、鵬鳥がその胸中を賈誼に聞かせたのに擬して、3句で見た鶴の仕草から、鶴が心の内を蘇軾に聞かせようとしているのか、と推し量っている。『四河入海』卷二三の三に引く瑞溪周鳳の説に「蓋シ坡言フ、此ノ鶴 我ガ之ヲ呼ブ心ニ応ゼズ、自ラ言フ能ハズ、想フニ我 汝ニ代ハリテ賈誼ガ鵬ニ代ハレルガ如クスルコトヲ欲スルナラント。故ニ下ノ四句ハ皆ナ鶴ニ代ハリテ言フ也」とある。5○我生如寄 我生は、私の人生。寄は、仮に身を寄せること。蘇軾は自らの人生、また人の生をしばしば「如寄」と詠じる。山本和義「詩人と造物」第一部二「蘇軾詩論考」を参照。ここで我は、鶴の自称。○崎孤は、崎も孤も、ひとつ。鶴は、性孤高の鳥とされる。『蘇軾詩注解（十三）』に取める作品番号一七九五の詩の注を参照。5句から8句までの四句は、鶴の胸中を蘇軾が鶴に代わって述べている。6○三尺一句 三尺は、鶴の胴体の、地面からの高さ。ひいて鶴の脚の長さをいう。『詩経』小雅（鴻雁之什）「鶴鳴」の孔穎達疏に引く陸璣『毛詩草木虫魚疏』に「（鶴は）長脚にして青翼、高さ三尺」とある。闇は載の義で、そこへおおくこと。蘇軾「謫居三適 三首」

の「午窓坐睡」（『蘇東坡詩選』二九四頁）に「蒲団 両膝を盤し、竹几 双肘を闇く」とある。その注を参照。7〇 俛啄 俛は、頭をたれる。啄は、嘴くちばしでついばむ。蘇軾「韓幹の馬十四匹」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊三七六頁）を参照。〇少許 少しだけ。蘇軾「次韻して劉涇に答う」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊五五七頁）を参照。8〇何至一句 身は、鶴の身体。子は、鶴から見た「あなた」、蘇軾を指す。一句は、7句で詠じるように、餌もわずしか摂ることができず、瘦せた身を保つことで精いっぱいいな鶴には、蘇軾を愉しませるような、飛翔や羽はたきなどをする余力はない、と述べている。鶴を好んだ晉の支遁が、二羽の鶴の羽を傷つけて逃げられないようにすると、鶴は頭を垂れて傷んだ羽をじっと見て、いかにも恨み悲しんでいる様子をした。支遁はそれを見て「既に陵霄の姿有り、何ぞ肯て人の為に耳目の近玩と作らんや」と言った、という（『世說新語』言語篇）。一句に詠まれた鶴の思いは、支遁が推し量った鶴の胸中と重なる。瑞溪周鳳の説に「鶴 蓋シ言フ、我が身 疲倦ス、故二坡ノ為ニ舞ヲ作シテテ 娯玩ヲ供スベカラザルナリト」とある。9〇斯須 しばし。須臾と同じ。須臾に作るテキストもある。『礼記』祭義に「礼楽は斯須も身を去るべからず」とあり、その注に「斯須は、猶お須臾のごとし」とある。また、杜甫「哀しいかな王孫」詩（『杜詩詳注』巻四）に「敢えて長語して交衢に臨まず、且つ王孫の為に立つこと斯須」とある。10〇餅餌 餅も餌も麦などの粉で作る団子状の食物。蘇軾「文与可の「洋川の園池 三十首」に和す 南園」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊六五頁）を参照。11〇戛然長鳴 戛は、金石のかち合う音。ここでは鶴の鋭い鳴き声のさま。蘇軾「後赤壁の賦」の注（『蘇軾詩選』三三九頁）を参照。12〇難進易退 進むには慎重に処し、退くには潔く処する。君子の出処進退をいう。『礼記』表記に「君に事うるに進み難くして退き易ければ、則ち位に序有り」とあり、また「故に君子は三たび揖して進み、一たび辞して退く。以て乱を遠ざくるなり」とある。一句は、11句で鶴の毅然とした振る舞いを詠じたのをうけて、君子の出処進退において、蘇軾は自分は鶴に及ばないと述べている。

庭の鶴は人に馴れていて呼べば寄ってくるはずなのだが、私が呼んでかたわらに立たせようとすると、鶴は厭いとうような顔つきで斜めに私を見る、あの鵬鳥が賈誼かぎにしたように私に胸中を伝えようというのだろうか。

「私はこの世に仮に身を寄せているだけの様なもので、ほんにひとりぼっち、瘦せた身体を三尺の細長い脚でようよう支えています。頭をたれて啄んでも少しだけでお腹いっぱいになって残してしまいます、この身がこのうえどうしてあなたを愉しませられましょう」。

追い立てて堂上にのぼらせてもほんのしばらく立っているだけ、食べ物を投げてあげても無関心。クワアーと高い声をひいて鳴くや、庭へ舞い降りる、進むに慎重、退くに迷わず、というその潔い生き方にかけて私はこの鶴に敵わない。

(担当 原田直枝)

一九八一(施三四二〇)

送曾仲錫通判如京師

曾仲錫通判が京師に如くを送る

- |   |         |         |           |
|---|---------|---------|-----------|
| 1 | 邊城歲暮多風雪 | 邊城      | 歲暮れて風雪多し  |
| 2 | 強壓春醪與君別 | 強いて春醪を  | 壓して君と別る   |
| 3 | 玉帳夜談霜月苦 | 玉帳      | 夜談して霜月苦え  |
| 4 | 鐵騎曉出冰河裂 | 鐵騎      | 曉に出でて冰河裂く |
| 5 | 斷蓬飛葉捲黃沙 | 斷蓬飛葉    | 黃沙を捲き     |
| 6 | 祇有千林鬢鬆花 | 祇だ千林の鬢鬆 | の花有るのみ    |
| 7 | 應爲王孫朝上國 | 応に王孫の爲に | 上國に朝すべし   |

- 8 珠幢玉節與排衙  
珠幢 玉節 与に排衙す
- 9 左援公孝右孟博  
左には公孝を援き 右には孟博
- 10 我居其間嘯且諾  
我其の間に居りて嘯き且つ諾す
- 11 僕夫爲我催歸來  
僕夫 我が爲に歸るを催して來る
- 12 要與北海春水爭先回  
北海の春水と先を争うて回るを要す

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○曾仲錫 曾孝広のこと。仲錫はその字。この時の定州通判。作品番号一九七二「曾仲錫承議が蜜漬の生荔枝を食らうに次韻す」詩の注（『蘇軾詩注解（二十九）』）を参照。

2 ○強圧一句 圧は、酒を搾る。春醪は、春に造った濁り酒。陶淵明「挽歌詩 三首」その二（『陶淵明集』卷四）に、「春醪 浮蟻を生じ、何れの時か更に能く嘗めん」とある。この詩を作った時はまだ冬なので、「強いて」という。

3 ○玉帳一句 玉帳は、將軍の陣営のとはり。顔之推「我が生を觀る賦」（『北齊書』文苑伝の顔之推の伝）に、「金城の湯池を守り、絳宮の玉帳に転ず」とある。霜月は、寒い夜の月。謝朓「同羈 夜に集う」詩（『謝宣城詩集』卷四）に、「霜月 始めて砌に流れ、寒蛩 早に隙に吟ず」とある。白居易「早朝 退居を思う」詩（『白居易集箋校』卷一九）に、「霜は厳しく月は苦えて明けん」と欲する天、忽ち閑居を憶いて思い浩然たり」とある。4 ○鉄騎 よろいをつけている軍馬。また、精銳の騎兵のこと。『後漢書』公孫瓚伝に、「且つ五千の鉄騎を北隰の中に厲し、火を起こして応と為す」とある。○氷河 凍った河。鮑照「空城の雀に代わりて」詩（『鮑氏集』卷三）に、「朝に野粟を食らい、夕べに氷河に飲む」とある。5 ○断蓬 風が吹くと根が抜けて転がり飛ぶ蓬。唐・王之涣「九日送別」詩（『全唐詩』卷二五三）に、「今日暫く芳菊の酒を同にし、明朝応に断蓬と作つて飛ぶべし」とある。6 ○鬢鬆花 こおった霧。寒さのために、霧が水の珠となるさま。霧凇ともいう。7 ○応為一句 王孫は、貴公子。良家の若者を呼ぶ語。『史記』淮陰侯伝に、「母怒りて曰く、大丈夫の自ら食すること能わず、吾れ王孫を哀れみて食を進む、豈に報いを望まんや、



と」とある。上国は、都のこと。梁・江淹「四時の賦」（『江文通文集』巻二）に、「上国の綺樹を憶い、金陵の蕙枝を想う」とある。8〇珠幢一句 珠幢は、珠を飾りとした旗。儀仗や軍の指揮に用いる。元稹「琵琶の歌」（『元稹集』巻二六）に、「一たび弾じて既に罷む 又た一たび弾き、珠幢 夜静かにして風は珊瑚たり」とある。玉節は、天子や諸侯の使節が持つ、玉でつくったしるし。「謝運使仲適の座上にて王敏仲が北に使用するを送る」詩（『蘇軾詩注解』（二十九）の注を参照。排衙は、官界の儀式。長官が着席後、部下は順次に参列して両側に並び立つこと。白居易「雪雨り朝を放つ、因つて微之を懐う」詩（『白居易集箋校』巻一四）に、「知らず 雨雪 江陵の府、今日 排衙 免さるるを得しや無や」とある。9 10〇左援・我居二句 後漢の代、汝南の太守宗資は公務をすべて功曹の范滂（字は孟博）に任せ、南陽の太守成瑨は公務をすべて功曹の岑孝（字は公孝）に任せため、「汝南の太守は范孟博、南陽の宗資は画諾を主る、南陽の太守は岑公孝、弘農の成瑨は但だ坐嘯す」とうたわれた（『後漢書』党錮伝）。画諾は、承認のサインをすること。「趙郎中 和せらる。戯れに復た之に答う」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊一一七頁）を参照。二句は、曾仲錫は部下として有能であるから、自分は後漢の両太守のようにのんびりしておればよいという意。11〇僕夫 しもべ。召使の男。『詩経』小雅（鹿鳴之什）「出車」に、「彼の僕夫を召して、之に載せよと謂う」とある。12〇北海 北方の海。ここでは北方の極遠の地を指す。『春秋左氏伝』僖公四年に、「君は北海に処り、寡人は南海に処り、惟だ是れ風する馬牛も相及ばざるなり」とある。

辺地は年末になって風雪が一層厳しくなったが、何と春の新酒をしほってあなたへの送別の宴をしてあげよう。將軍のテントで夜の軍議を交わすときには霜おりの夜の月が冴えざえとしており、鉄の騎馬が朝早く出発すると川の氷も踏み砕かれてしまう。蓬や落ち葉が黄砂とまぎって乱れ飛んでいる中、ただ無数の樹林に霧氷の花が咲いている。まさに都へのぼるあなたのためだろうか、珠玉の旗印を持っている役人たちの列のようだ。

左右に岑公孝と范孟博のような君という有能な補佐がいるおかげで、私はその間に座って嘯き歌ったり書き

判をかいたりしておればよかった。下僕たちよ、私のためにご主人の帰還を促しておくれ、北の海に春水が流れ込むよりも早くなるように。

一九八二（施三四—二二）

和錢穆父送別并求頓遞酒

錢穆父が送別に和す、并せて頓遞酒を求む

- 1 聯鑣接武兩長身  
鑣を聯ねて武を接す 兩長身
- 2 鵞鷺行中笑語親  
鵞鷺行中 笑語親しむ
- 3 九子羨君門戶壯  
九子 君が門戶の壮なるを羨み
- 4 八州憐我往來頻  
八州 我が往來の頻なるを憐む
- 5 佇聞東府開賓閣  
聞くを待つ 東府に賓閣を開かんことを
- 6 便乞西湖洗塞塵  
便ち西湖を乞うて塞塵を洗わん
- 7 更向青齊覓消息  
更に青齊に向つて消息を覓む
- 8 要知從事是何人  
知るを要す 從事は是れ何人なるかを

元祐八年（一九〇三）、五十八歳の作。

○錢穆父 錢鏐のこと。穆父はその字。「錢越州に次韻す」詩の注（『蘇軾詩注解（二三）』）を参照。○和錢穆父送別蘇軾が定州に赴任する途中に書いた錢鏐への手紙が存する（『蘇軾文集』卷五一「錢穆父に与う 二十八首」その二十八）が、その中に、「（錢鏐から送別の詩をもらい）「和答せんと欲するも、人客織るが如く、当に前路を俟つべし」

とあり、この詩は後に作られたと思われる。○頓遞は、軍事のため駅で酒や食物を用意すること。道に酒食を設けて軍隊に供するを頓といひ、郵駅を置くを遞という。後唐から宋代初期には、大きな行事を行う際に頓遞使を設置して、都の長官に担当させた。宋・徐度『御掃編』巻下の「橋道頓遞使」の説明に、「惟だ頓遞司は例ね酒を造りて近臣に分飭す。京師は頓遞司酒を称して最も美なりと為す」とある。

1 ○聯鑣一句 鑣は、くつわ。馬の口にかませて手綱をつける鉄輪。聯鑣は、一緒に乗馬すること。張協「七命」(「文選」卷三五)に、「肴駟 鑣を連ね、酒駕 軒を方ぶ」(連は聯に同じ)とある。接武は、堂上を歩くときの歩き方で、武は、足跡。前足の跡の半分を、後足が踏むように歩くこと。『礼記』曲礼上に、「堂上には武を接し、堂下には武を布く」とある。唐・権徳輿「崔牛牛四郎が早秋に寄せらるるに酬ゆ」詩(『全唐詩』卷三三二)に、「鑣を聯ぬ 長安道、武を接す 承明宮」とある。長身は、背丈の高い人。韓愈「唐の正義大夫尚書左丞孔公の墓誌銘」(『韓昌黎集』卷三三三)に、「白うして長身なり。笑うと言うと寡し」とある。「表弟程德孺が生日」詩の注(『蘇軾詩注解』(二十九)「所收」を参照。2 ○鷓鴣一句 鷓鴣は、鷓鴣とサギ。その飛ぶさまが整然としているので、朝廷の百官にたとえる。「定国が寄せらるるに次韻す」詩(『蘇軾詩注解』(二十三)「)の注を参照。3 ○九子一句 陸游『老学庵筆記』(卷十)によれば、汴京の九子母祠(子宝を授けるといふ)の傍らに、九子母の夫と伝えられる座像があった。錢穆父に九人の息子がいることを、蘇軾がこの詩句によって、「蓋し之に戯るるなり」といふ。4 ○八州一句 蘇軾は熙寧七年より、知府として密州、徐州、湖州、登州、杭州、穎州、揚州、定州を歴任した。5 ○東府開賓閣 前漢の公孫弘は宰相となると、客館を設けて、役所の東側の門のわきにある小さい門を開いて賢人を招いた(『漢書』公孫弘伝)。「王誨が夜坐に次韻す」詩の注(『蘇東坡詩集』第二册五五頁)を参照。6 ○西湖一句 王十朋の注に引く李厚の説によれば、蘇軾は実は越州(紹興市)に移りたかつたのだが、この句では東府の対とするため越州の鑑湖ではなく、杭州の西湖にしたという。7 8 ○更向・要知二句 青齊は、美酒の異称。『世説新語』術解篇に、「桓公(桓温)に主簿の善く酒を別かつもの有り。酒有らば輒ち先ず嘗めしむ。好き者は青州の従事と謂い、悪しき者は平原の督郵と謂う。青州に齊郡有り、平原に鬲原有り。従事は臍(へそ)に到るを言い、督郵は鬲上(隔膜)に在りて住まるを言う」とある。

いつも共に連れ立って行動する背が高いわれわれ二人は、朝臣の行列の中で談笑を交わしていた。あなたは九人のご子息に恵まれて家運が盛んで羨ましい限りだが、わたしは八つの州を転々と移ってどうも薄幸なものであった。

そのうちに宰相にご昇進なさって賓客を迎えるようになったら、わたしはさっそく杭州を願いたてまつって、西湖の水でこの辺地のほこりを洗い流させてもらおう。そのうえで青州の齊郡の様子をお尋ねしたい。「青州従事」（頓遞酒）はいったいどなたなのか、ぜひとも知りたいものです。

（担当 蔡毅）

一九八三（施三四―三二）

劉醜廝詩

劉醜廝の詩

- |   |       |              |
|---|-------|--------------|
| 1 | 劉生望都民 | 劉生は望都の民      |
| 2 | 病羸寄空窯 | 病羸して空窯に寄す    |
| 3 | 有子曰醜廝 | 子有り 醜廝と曰う    |
| 4 | 十二行操瓢 | 十二にして行きて瓢を操る |
| 5 | 播間得餘粒 | 播間に余粒を得      |
| 6 | 雪中拾墮樵 | 雪中に墮樵を拾う     |
| 7 | 飢飽共生死 | 飢飽 生死を共にし    |

- 8 水火同焚漂 すい、か 焚漂を共にせんと
- 9 病翁恃一榻 びやうおう 一榻を恃んで
- 10 度此積雪宵 この積雪の宵を度る
- 11 哀哉二暴客 かな 二暴客
- 12 掣去如飢鴉 ひきき去りて飢鴉の如し
- 13 翁既死於寒 おう 既に寒に死し
- 14 客亦易此齟 かく 亦た此の齟を易る
- 15 崎嶇走亭長 さきく 崎嶇として亭長に走り
- 16 不憚雪徑遙 せつげい 遙かなるを憚らず
- 17 我仇祝與苑 わ 仇は祝と苑と
- 18 物色同遮邀 ぶつしよく 物色して同じく遮邀す
- 19 行路爲出涕 こうろ 為に涕を出だし
- 20 二客竟就臬 にかく 二客 竟に臬に就く

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○劉醜斯詩 この詩は、劉醜斯なる人物をめぐる事件の顛末を詠じたもので、蘇軾自身も作中で言及するように、その内容は柳宗元「童区寄伝」（『柳河東集』卷一七）に似る。

1 ○望都 定州の県名（『太平寰宇記』卷六二）。2 ○病羸 病んで身体が衰えること。○空窻 空っぽの（使われなくなった）かま。窻は、土器や瓦などを焼くかまのこと。困窮者がそこを住処にするという設定は、小説戯曲の類にしばしば見られ、例えば『初刻拍案驚奇』卷三五には「晚間在破窻中安身」とある。3 ○醜斯 斯の字には奴僕の意

がある。4○操瓢 物乞いをする。「莊子」盜跖篇に、「此の四子は、磔犬流豕、瓢を操りて乞う者に異なる無し」とある。5○墮穠 一句 墮は、墓のこと。「孟子」離婁下に、「卒に東郭墮間の祭る者に之き、其の余りたるを乞う」とあり、趙岐注に、「墮間は、郊外の冢間なり」とある。粒は、こめつぶ。6○墮樵 地面に落ちた雜木。王安石「王致処士を悼む」詩（『臨川先生文集』卷三五）に、「老妻 稲下に遺秉を分かち、弱子 松間に墮樵を拾う」（秉は、一握りの稲束）とある。8○焚漂 火に焼かれることと、水に浮かびたただようことと。蘇軾以前に用例を見ない。9○褐 毛ごろも。または、粗末な布で作った上衣。「孟子」滕文公上篇に、「許氏は褐を衣る」とあり、趙岐注に、「許氏 褐を衣るは、毳（毛の布）を以て之を織る。今の馬衣（馬を覆う衣）の若し。或るひと曰く、褐は、臬衣（麻衣）なりと。又た曰く、粗布の衣なり」とある。「柳子玉に次韻す 二首、地爐」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一九五頁）を併せて参照。11○暴客 無法者。盜賊。「周易」繫辭下に、「門を重ね柝を撃ち、以て暴客を待つ」とある。12○鴞 フクロウ。残忍凶悪な者に喩えられる。一句について一韓智翹は、「二暴客ノ盜ガ、是ガ一褐衣ヲ奪（ヒ）取ルコトハ、飢（エ）タル鴞ノ、物ヲツカムガ如キゾ」（『四河入海』二五の三）と記す。14○易 あなごる。輕易する。詩題の注で述べた柳宗元「童区寄伝」において、縛られた区寄が、酔い潰れて寝てしまった賊の一人を殺す場面に、「寄 偽りて児啼し、恐慄して児の恒の状を為す。賊 之を易り、対して飲み、酒に酔う」とある。これを意識した表現であろう。○齠 幼い。また、幼児。齒の抜け替わる七、八歳の年齢をいう。「京師にて任遵聖を哭す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二〇七頁）を参照。この字を貂の字に作るテキストがあるが、馮応榴は誤りと指摘する。15○崎嶇 山道などに高低があつて平坦でないさま。また、行き悩むさま。陶淵明「帰去來の辞」（『陶淵明集』卷五）に、「既に窈窕として以て壑を尋ね、亦た崎嶇として丘を經」とある。○亭長 宿場の長。戦国時代から秦・漢にかけて、十里ごとに一亭を置き、治安や訴訟の任に当たさせた。漢の高祖が初め泗水の亭長となったこと（『史記』高祖本紀）、烏江の亭長が漢に敗れた項羽を東に渡そうとしたこと（『史記』項羽本紀）などが知られる。張守節の正義（高祖本紀）に、「亭長は、蓋し今の里長なり」という。17○祝・苑 二人の賊の姓。18○物色 求めるべき人や物をさがすこと。『太平御覽』卷五〇九に引く嵇康「高士伝」に、「関令尹喜は、周の大夫なり。……老子西遊するや、喜 先んじて氣

を見、物色して之を遮り、果たして老子を得たり」とある。○遮邀 迎え撃つ。待ち伏せて打つ。『旧唐書』陸贄伝に、「諸鎮に詔して兵を発せしむと雖も、唯だ虚声を以て応援し、互いに相瞻顧するのみにて、敢えて遮邀するもの莫し」とある。19○行路 道を行く人。引いて、世の人。世間。『後漢書』党錮伝の范滂の伝に、「行路之を聞ききて、流涕せざるは莫し」とある。20○梟 さらし首。罪人の首を斬つて高所にさらすこと。『史記』高祖本紀に、「故の塞王（司馬）欣の首を櫟陽の市に梟す」とあり、索隠に「梟は、首を木に懸くるなり」という。

劉生は望都の民、病み衰えた身を空の窠に寄せていた。劉生には醜厮という名の子供がいて、十と二つで瓢を手に物乞いをし、墓場でお供え物のご飯の残りにありついて、こぼれ落ちた柴を雪の中から拾って暮らしていた。腹を満たすも飢え死にするのも父とともに、火に焚かれようと水に流されようと父と一緒に、と（劉生に尽くした）。その病んだ老父はただ一枚の毛ごろもをはおって、雪の降り積む夜を過こしていた。

だが哀れにも二人の盗賊が、飢えたフクロウのようにそれを剥いでいった。老父は寒い中に（放置されて）凍え死に、醜厮も賊たちに、まだ幼児だから、と馬鹿にされて捨て置かれた。

醜厮は苦しい道のりを亭長のもとに走った。長い雪道をもともせず。その仇は祝と苑という者、自ら二人の人相を確かめて、どちらもつかまえさせた。世の人はその一部始終を知って涙し、ついに二人の賊はさらし首となった。

- 21 讒讒訴我庭 讒讒として我が庭に訴え
- 22 慷慨驚吾僚 慷慨して吾が僚を驚かす
- 23 曰此可名寄 曰く此れ寄と名づく可し
- 24 追配郴之堊 郴の堊に追配せん

- 25 恨我非柳氏 うらむらくはわれりゅうしに非ず
- 26 擊節爲爾諂 せつをうつてなんじがためにうた
- 27 官賜二萬錢 かん 二まんせんを賜う
- 28 無家可歸嬌 いえ とうべ 家に帰ぐ可き嬌無し
- 29 爲媾他日婦 ため たいじつ 爲に他日の婦を媾し
- 30 婉然初垂髻 えんぜん 婉然として初めて髻を垂る
- 31 洗沐作小吏 せんもく 洗沐して小吏と作し
- 32 裹頭束其腰 かとう 裹頭して其の腰に束す
- 33 筆硯耕學苑 ひつげん 学苑に耕せんか
- 34 弓矛戰天驕 きゆうぼう 天驕と戦わんか
- 35 壯大隨爾好 そうだい 壯大にして爾が好みに隨う
- 36 忠孝福可徼 ちゆうこう 忠孝にして福 徼む可し
- 37 相國有折脅 しやうこく 脅を折ること有り
- 38 封侯或吹簫 ほうこう 或いは簫を吹く
- 39 人事豈易料 じんじ 豈に料り易からんや
- 40 勿輕此僬僥 こ 勿し輕んずる勿かれ

21○讒譏 騷がしいさま。『莊子』至梁篇に「彼れ唯だ人の言を之れ聞くを惡む。奚ぞ夫の讒譏たるを以て為さんや」とある。○庭 役所。22○慷慨 感情を高ぶらせてなげく。『史記』高祖本紀に、「高祖 乃ち起ちて舞い、慷慨傷



懐し、泣数行下る」とある。○僚 あいやく。同僚。23 24 ○曰此・追配二句 寄は、柳宗元「童区寄伝」（詩題の注を参照）に記された少年の名に因んでかく名づけることをいう。郴は、湖南省の郴州。薨は、柴刈りや牛追ひのこと。「童区寄伝」に、「童の寄なる者は、郴州の薨牧の兒なり」（薨牧は、柴刈りや牛追ひ）とある。25 ○柳氏 柳宗元のこと。詩題の注および23 24句の注を参照。26 ○擊節（手や楽器などで）拍子をとる。左思「蜀都の賦」（『文選』巻四）に、「巴姫 弦を弾じ、漢女 節を撃つ」とある。節は、拍子をとる楽器。28 ○婦 とつぐ。嫁に行く。『詩経』周南「桃夭」に、「之の子 于き婦がば、其の室家に宜しからん」とある。○嬌 美女。『樂府詩集』巻四二に引く梁・費昶「長門怨」に、「金屋 嬌を貯むる時、君 入らずと言わざれ」とある。29 ○嬌 縁組みをする。『藝文類聚』巻四一に引く曹丕「猛虎行」に、「君と新欲を嬌じ、託りて二儀に配す」とある。30 ○婉然 女性のしとやかで美しいさま。『初学記』巻一九に引く司馬相如「美人の賦」に、「女の独り処る有り、婉然として牀に在り」とある。○垂髻 垂れ髪。また、童児のこと。童児は髪を結わずに、襟首に髪を垂らしているのをいう。潘岳「藉田の賦」（『文選』巻七）に、「裾を被り裾を振るい、髻を垂れ髪を総ぬ」とある。31 ○洗沐 髪やからだを洗い清める。『史記』王翦伝に、「王翦日び士を休めて洗沐せしめ、而も善く飲食して之を撫循し、親ら士卒と食を同じうす」とある。漢代、官吏には五日に一日の沐浴のための休暇（休沐）が与えられた。○小吏 吏の字を史に作るテキストがある。柳宗元「童区寄伝」に、区寄の事件の報告を受けた桂州刺史の顔証が、「之を奇とし、留めて小吏と為さんとするも、肯んぜず」というくだりがあることから、小吏とすべきである。32 ○裏頭 男子が成年に達すると、その頭髪を三尺の黒い絹布で包む慣習があった。杜甫「兵車行」（『杜詩詳注』巻二）に、「去る時 里正 与に頭を裹む、帰來 頭白 還た辺を成る」とある。○束其腰 腰に帯をしめる。官吏として正装すること。33 ○筆硯一句 筆硯は、筆とすずり。引いて、詩や文章を書くこと。また、それを職業とすることを筆耕という。『藝文類聚』巻五八に引く華嶠「後漢書」に、班超の言葉として「大丈夫安くんぞ能く久しく筆耕を事とせんや」とある。○学苑 まなびや。学校。34 ○弓矛 弓とほこ。武器をいう。○天驕 天にあまやかされて驕っている者の意で、もとは匈奴のことだが、蘇詩では契丹を指していることが多い。『蘇東坡詩選』に収める「子由が契丹に使するを送る」詩の注（二四八頁）を参照。35 ○壮大 長じて

成人となる。『漢書』元帝紀に、「八歳にして、立ちて太子と為る。壮大なるとき、柔仁にして儒を好む」とある。以上の三句について、一韓智翹は「サテ醜斯、後二ハ筆硯ヲ以テ、学苑ニ耕シテ儒ニナランカ。戈矛ヲ以テ、後二ハ天驕ノ胡人ト戦ハンカ。汝壮大ニナリテ、兔毛角モコノミノママゾ」と記す。36○福可徹『春秋左氏伝』僖公四年に、「君恵みて福を弊邑の社稷に徼め、辱く寡君を収むるは、寡君の願ひなり」とある。37○相国一句 相国は、秦の宰相（相国）となった范雎のこと。范雎は初め魏の中大夫須賈に仕え、須賈が使者として斉に赴いた際、これに同行した。このとき斉の襄王が、范雎の弁舌の噂を聞いて彼に黄金と牛酒を贈ったが、范雎は辞退した。それを知った須賈は、范雎が魏の秘密を斉に洩らしたと考え、帰国後に宰相の魏斉に告げた。魏斉は激怒して范雎を笞で打たせ、それによつて肋骨（脅）や歯を折られた范雎は、死んだふりをして何とかその場を逃れた。後に范雎は秦に入国し、昭王に認められて宰相の位に就いた（『史記』范雎伝）。38○封侯一句 封侯は、漢の高祖に仕え、絳侯に封ぜられた周勃のこと。周勃は初め蚕のスノコを織るのが仕事で、葬式があると籥を吹いてそれを助けた。高祖の拳兵後は將軍として数々の戦功を立て、列侯の爵位を授与され、絳（山西省の地名）を領地として絳侯に封ぜられた（『史記』周勃世家）。40○焦饒 伝説中の小人国、またはそこに住む民族の名。『列子』湯問篇に、「中州（中国）より以東、四十万里にして、焦饒国を得、人の長一尺五寸」とある。ここでは、まだ一二歳の醜斯を喩えていう。

醜斯は我が役所でこの次第をあだこうだと述べたものだから、それを聞いた役人たちは驚き憤る。私は言った、「この者に寄の名を与えて、かの柳の柴刈りに並ぶ者としてたたえよう。残念ながら柳氏（宗元）のように立派な伝記を書いてやることはできないが、（せめて）おまえのために拍子をとつて（詩に）うたつてやろう」と。

お上からは二万錢を賜ふこととなつたけれど、家には迎える嫁もない。では将来の妻と縁組みをしてやろう、まだ垂れ髪にしたばかりのかわいい娘と。沐浴をさせて下役に取りたててやろう。頭巾をかぶり腰帯を締めるのだ。筆と硯もて学び舎に学ぶもよし、弓と矛もてえびすと戦うもよし。大人になれば思い通りにするがいい。

忠義孝行に励むなら福は得られよう。あばらを折られた范雎が秦の相国となり、若いころ葬式で簫を吹いていた周勃が絳侯に封ぜられた。人の世のこともはとかく見通しが立たぬもの、僬僥の民のように小さなこの子とて軽んじてはならない。

一九八四（施三四―一三）

題毛女眞

毛女の眞に題す

1 霧鬢風鬢木葉衣

霧鬢 風鬢 木葉の衣

2 山川良是昔人非

山川 良に是なるも昔人は非なり

3 祇應閒過商顔老

祇だ心に間に商顔の老に遇りて

4 獨自吹簫月下歸

ひとり自ら簫を月下に吹いて帰るなるべし

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○毛女 山中に住み、身体に毛を生やしていたという仙女。『太平広記』巻五九に引く劉向『列仙伝』に、「毛女、字は玉姜、華陰（陝西省）の山中に在り。山客・獵師 世世之を見る。形体に毛を生ず。自ら言う、秦の始皇の宮人なり。秦亡ぶるや、流亡して山に入る。道士 教えて松葉を食らわしめ、遂に飢寒せず、身 軽きこと此くの如し。西漢の時に至り、已に百七十余年なりき」とある。○眞 えずがた。顔や姿を本物に似せて写しとった絵図。

1○霧鬢風鬢 鬢が霧にさらされ、鬢が風に乱される。女性の頭髮がばらばらで整っていないさま。「風鬢雨鬢」とも言う。『太平広記』巻四一九に引く李朝威「柳毅伝」（『太平広記』は「異聞集」に出ず）と記す）に、「大王の愛

女の、羊を野に牧するを見る。風環、雨鬢、視るに忍びざる所なり」とある。○木葉衣 『晉書』董景道伝に、「天下の將に乱れんとするを知り、商洛山に隠れ、木葉を衣、樹果を食らう」とある。2○山川一句 山や川は元のままに在るけれども、人は昔の人ではない。遼東の丁令威が仙道を得て、鶴に姿を変えて故郷に帰ったところ、若者が彼を弓で射ようとした。丁令威は「鳥有り 鳥有り 丁令威、家を去ること千年 今始めて帰る、城郭は故の如きも人民は非なり、何ぞ仙を学ばざる 冢累累たり」と歌つて去つた（陶淵明『搜神後記』巻一）。3○商顔 商山（陝西省）のこと。『漢書』溝洫志に、「是に於て卒万余人を發して渠を穿ち、微（地名）自り洛水を引きて商顔の下に至らしむ」とあり、顔師古の注に「商顔は、商山の顔なり。之を顔と謂うは、人の顔額に譬うるなり」という。同様の記述が、『史記』河渠書にも存するが、そこでは集解が服虔を引いて、「顔の音は、崖なり」（意味も同じ）と言つており、こちらを取るべきか。商顔の老は、商山の四皓のこと。漢の高祖は晩年になり、呂后の子の孝恵太子を廢して、戚夫人の子の如意を太子に立てようとした。これを恐れる呂后の意を受けた張良は一計をめぐらせ、商山に隱棲する四人の老人（東園公、用里先生、綺里季、夏黃公。皓は白の意で、白髮の老人のこと）を礼を尽くして呼び寄せ、太子を輔佐させた。高祖はそれを見て、「彼の四人 之を輔く、羽翼已に成りて、動かし難し」といい、かくして太子の地位は安泰となった（『史記』留侯世家）。4○吹簫 いま通行する『列仙伝』（清・琳琅秘室叢書本）巻下の毛女の伝には、詩題の注に引用した『太平広記』の文に加えて、「止まる所の巖中に鼓琴の声有りと云う」と、音楽に関する記述がある。

ばらばらの乱れ髪に木の葉の着物、すみかの山川は昔のままだが昔の人はもういない。のんびりと商山の四皓を訪ねてゆき、月明かりのなか簫を吹きつつ独り帰りゆくのだらう。

（担当 西岡 淳）